身延山久遠寺研究
ー伽藍の変容についてー

AK11058　荘司　柚太

Keywords
日蓮宗　身延山　久遠寺
伽藍　復原

1　研究背景・目的

身延山久遠寺は山梨県南巨摩郡身延町に現存する日蓮宗の総本山である。文永11年(1274)に甲斐国波木井の南部実長の領地、身延山に入った日蓮聖人が西谷に3間4間の草庵を構えるに伴い開創した。宗祖日蓮聖人の草庵創建以来、身延山には多くの堂宇が建立されてきたが、身延はたびたび火災に見舞われた。しかし、明治8年(1875)に発生した火災では本堂、祖師堂など本院諸堂75棟が焼失し、身延山火災中最大のものとなった。

2014年度、山梨県近代和風建築調査に参加する機会を得た。本研究では焼失したが再建され現存している伽藍を対象とし、調査で得た図面で復原を行い絵図との比較をすることで久遠寺伽藍についての考察を行う。

2　研究方法

① 身延山久遠寺での実測調査を行った。

期間	2014年3月20日～3月22日	
対象建築	恩親閣仁王門	三門
	祖師堂	本地堂
	大鐘楼	太子堂
	仏殿納牌堂	御真骨堂拝殿
	旧書院	新書院
	法喜堂	大客殿
	甘露門	時鐘楼
	信行道場大講堂	祖廟塔
	大荒行堂水行堂	大荒行堂瑞門
	大荒行堂尊神童	祖廟域常唱殿

② 対象建築の平面図の作成、
③ CADでの伽藍復原
④ 焼失前の伽藍絵図の入手、比較分析を行う。

3　身延山久遠寺について

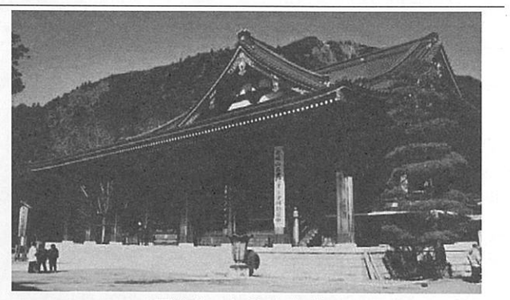

写真1　久遠寺本堂

所在地	山梨県南巨摩郡身延町身延3567
宗派	日蓮宗
寺格	総本山
本尊	三宝尊
創建年	弘安4年
開山	日蓮
開基	南部実長
正式名称	身延山妙法華院久遠寺

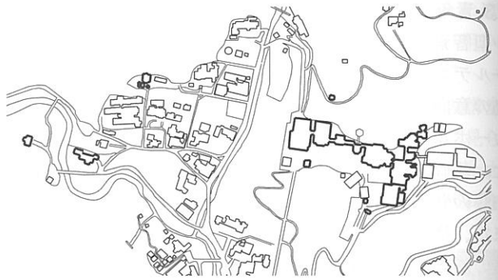

図1　身延山久遠寺周辺図

日蓮は文永11年(1274)に身延山に入り開創した。日蓮は弘安5年(1282)に入滅、遺骨は身延山に奉られている。その後、久遠寺は教団の本拠地となる。運営は輪番制、常住持制と変化していった。久遠寺は何回も火災の被害(表1)に見舞われている。特に明治8年(1875)に起きた火災では、本堂、祖師堂と言った主要堂宇だけでなく支院、町屋を含め144棟の堂宇にも広がり、大切に格護してきた宗祖御真蹟が全て烏有となった。

表1　身延山久遠寺火災年表

文永11年(1274)	日蓮が身延山に入り開創。
弘安4年(1281)	十間四面の大坊が落成。
延享4年(1747)	下之坊から出火。11坊が焼失。
文政4年(1821)	御廟八角堂が焼失。
文政7年(1824)	祖師堂より出火。多数の堂宇が焼失。
文政12年(1829)	五重塔から出火。28棟の堂宇が焼失。
明治8年(1875)	西谷から出火。144棟の堂宇が焼失。

4　開山・開基者

4.1日蓮

鎌倉時代の僧。日蓮宗(法華宗)の開祖。安房国(千葉県)長狭群東条郷の小湊出身。貞応元年(1222)に生まれる。12歳で清澄山に登り16歳で出家。その際に聖房蓮長に名を改める。延応元年(1239)、18歳に比叡山に遊学し京高野山・四天王寺の諸大寺において研鑽を行う。

4.2南部実長

鎌倉時代中期の御家人。南部光行の三男。日蓮の有力壇越として知られ、また甲斐国波木井に居住したことから波木井実長とも呼ばれる。

5　久遠寺伽藍について

5.1伽藍とは

伽藍は僧侶が集まり修行をする清浄な場所の意味である。後に寺院または寺院の主要建物群を意味するようになった。サンスクリット語のsaMghaaraamaの音写であり「僧伽藍摩」「僧伽藍」が略されて「伽藍」と呼ばれる。

5.2論文分析

日蓮宗寺院の建築・伽藍配置に関する研究には、丹羽博亨「日蓮の教義・行儀と伽藍観」、「日蓮宗身延山久遠寺、重須本門寺、池上本門寺の伽藍配置」等の研究がある。これらの研究論文の分析を行う。

初期日蓮宗寺院においては、ほとんどが住坊や檀越の持仏堂であった。しかし、日蓮の死後、日蓮への追慕想起の念は日蓮の御影像の造立、さらに御影堂(祖師堂)の建立へと発展した。なかでも本研究で対象としている身延山久遠寺では、早い時期から御影堂が建立された。この御影堂においては日蓮の命日たる10月13日を記念する主要行事や日々の行儀が行われ、本堂(釈迦堂)よりも規模が大きく、その後において規模を拡大し「大堂」と称され中心的堂宇としての性格が強い。

伽藍配置についてであるが、日蓮宗寺院において、伽藍配置の拠り所となったのは文字曼荼羅である。この文字曼荼羅の形態の特徴として、釈迦と多宝、上行と浄行、大日天と大月天、天台と伝教、鬼子母神と十羅刹女、天照と八幡のように、仏・菩薩・仏道修行者・諸天等を対比的に配している事である。伽藍配置の構成において2つの堂宇を対峙させて配置する事が多いが、これは文字曼荼羅の2つのものを対比的に配するという形態に則って構成されたものと考えられる。

図2　文字曼荼羅

また、日蓮宗の一派である日蓮宗富士門流の伽藍配置の研究によると、中枢伽藍を構成する本堂と御影堂の両堂の配置は、日我の「化儀秋決」に「本堂は左、御影堂は右」とある。この配置方法に則った寺院は、大石寺、北山本門寺、讃岐本門寺であった。また、御影堂と客殿の配置は同書に「御影堂は左、客殿己下は右なり」とあり、小泉久遠寺はこの配置方法に則っていた。この中枢伽藍の配置は明治8年以前の焼失前の身延久遠寺も同様の配置ではないかと考えられる。

5.3まとめ(焼失以前)

焼失以前の伽藍は現在と異なっている。その大きな点としては中央伽藍である境内の伽藍配置であろう。焼失以前の境内の伽藍配置としては、身延山絵図(図3)の様子からわかるが鶯谷を境として西側に本堂エリア、東側に書院エリアと大きく二つに分けられていることである。特に本堂エリアであるが本堂と仁王門を繋ぐ軸を中心として、その付近に塔や堂宇が建てられており、これは文字曼荼羅を意識して配置されたものであると考えられる。理由としては、石田茂作「新版仏教考古学講座」に日蓮宗の基本伽藍配置(図4)が書かれており、その配置は本堂と山門を軸として対比的に堂宇が配置されると指摘されるからである。ただし、絵図を解読すると文字曼荼羅を意識してはいるが所々対比的に配置されていない事が分かる。門正面に本堂はあるが、伽藍中央は祖師堂である(図5・6)。また鬼子母神堂はここから離れた山中にある。久遠寺には日蓮の遺骨があること、かつ山々に囲まれた場所のため、当時の環境によって敷地を選んだと考えられるのではないだろうか。

図3　身延山絵図（宝暦）

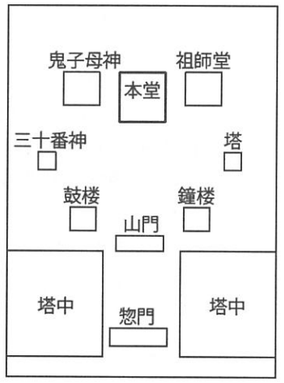

図4　日蓮宗伽藍配置

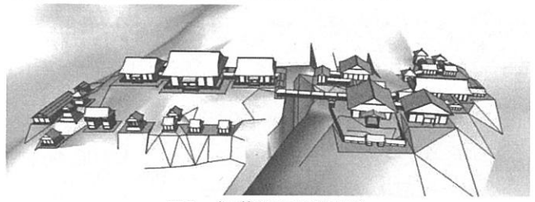

図5　伽藍復元1(宝暦)

図6　伽藍復元2(宝暦)

6　久遠寺伽藍の変遷

明治8年の火災以降、久遠寺は伽藍の復興に力を入れ立て直しを図ってきた。ただ復興を図る中で明治政府が行った「神仏分離令」や太平洋戦争時に施行された「宗教団体法」により神社・仏閣の内情はとても混乱していたものと考えられる。そのような時代背景の中、どのように復興をしてきたのか、伽藍の変遷を追い考察を行うこととする。

6.1焼失直後(明治8年～明治14年)

明治8年1月、火災によって久遠寺はそれまで所蔵してきた日蓮聖人真筆の大部分を失ったばかりでなく、中心的堂宇の多くを焼失してしまった。明治初年の久遠寺はこれらの堂宇の再建とそのための布教と勧募という課題を担わざるをえなかった。そうしたなかでも、中心的堂宇であった祖師堂・御真骨堂の再建は、火災があった年すでに着手されていった。(図7・写真2)

この時期は明治14年の日蓮聖人六百遠忌を数年後に控えていたため、祖師堂・御真骨堂の再建は必須の事業として遂行されなければならなかった為である。(図8・9)

表2　身延久遠寺年表1

1875	明治8年	1-10西谷本種坊より出火、諸堂残らず類焼(祈祷堂・脱師堂・影現社・鐘堂・五重塔・延師廟堂・寺中12ヵ坊・町10軒焼失、時鐘堂焼失)
		4西谷檀林講堂を移転し祖師堂仮殿とす
		本行坊客殿を曳て納骨仮殿とす
		11-9御真骨堂建立工事着工ず
1876	明治9年	4-8身延久遠寺釈迦堂・位牌堂を上棟す
		5身延山仮祖師堂落成す
1877	明治10年	4-10端場坊客殿庫裏焼失す
1878	明治11年	2-14久遠寺祖師堂再建祈始めす
1879	明治12年	2-3久遠寺祖師堂柱立す
1880	明治13年	4-14御真骨宝塔奉納される
1881	明治14年	3-21身延御真骨堂上棟式
		3-22御真骨堂拝殿の遷座式挙行
		3-25身延祖師堂上棟式

明治8年～明治14年

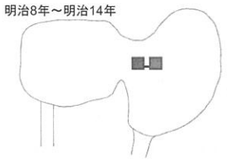

図7 伽藍変遷1(明治8年)

明治14年～昭和4年

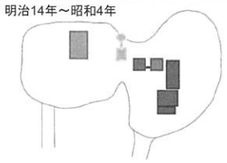

図8 伽藍変遷2(明治14年)

写真2 釈迦堂と位牌堂

図9 身延山絵図（明治）

6.2明治14年日蓮聖人六百遠忌～昭和6年(1881～1931)

明治14年には一通りの主要伽藍が再建され伽藍の機能を最低限回復させた。その後大客殿・大玄関・三門等も再建されたが、納骨堂位牌堂はなお仮殿が用いられていた。そのため昭和6年の日蓮聖人六百五十年遠忌に向けた記念事業の一環として位牌堂を新たに建設することを明治32年の会議で決議した。しかし、当時の久遠寺の状態はこれを許さず翌年の同会議によって積み立ての実施を当分延期することを承認せざるをえなかったのである。

その当時の時代背景としては、明治維新による幕藩体制の崩壊があった。当時の幕藩体制は、各藩の経済基盤である領地によって維持され、民衆は寺請制度によって管理されていた。そのため、明治政府は慶応4年に「神仏分離令」を発布し、幕藩体制の要である仏教を排撃した。特に明治4年には社寺領上地令が発布され、寺院は経済基盤が奪われる危機に直面する。続いて戸籍法の制定、宗門人別帳、寺請制度が廃止された為、仏教界は大混乱に陥っている状態であった。

こういった背景がある為、納牌堂建設計画は凍結された。だが20年後、大正9年の第7回臨時宗門末議会において再び審議され、同14年の第9回定期門末議会において敷地・費用などが決定された。敷地は釈迦堂と位牌堂を移設したその跡地となり、釈迦堂は鶯谷寮の跡地(写真3)、位牌堂は大客殿前へと移された。(図10)

表3　身延久遠寺年表2

1899	明治32年	5-12納骨位牌堂建設の議を審議す
1912	明治45年	4-8三門改築工事の上棟式す
		5-3御真骨堂の遷座式す
1920	大正9年	10-7久遠寺門末会議において、未設堂建設の件として納骨堂新設・水鳴楼改築案再び提議される
1925	大正14年	3-25身延山提起常置委員会で、本堂再建希望の件提案される
		11-24仏殿納牌堂の建立可決
		11門末議会で位牌堂を釈迦堂跡地に建設し、翌年竣工することが決定される
1926	昭和元年	この年、位牌堂を釈迦堂跡地に建設することを再確認する
1927	昭和2年	3-10身延山定期常置委員会において、仮本堂位牌堂建築様式図面及び設計を承認す
		6-1仏殿納牌堂建設願を提出す
1928	昭和3年	身延山仏殿納牌堂の起工式を挙げる
1929	昭和4年	6釈迦堂を鶯谷寮跡地へ引き移す
		従来の納牌堂を大客殿前に引き移す
		11-8祖廟域諸施設・草庵跡玉垣・参道敷石・新規築造・法界堂屋根銅瓦葺・廟堂奥殿・同向拝等2期工事完成し、落成式す
1930	昭和5年	仏殿納牌堂上棟式挙行す
1931	昭和6年	4-7仏殿納牌堂の開堂入仏式を奉行する

昭和4年～昭和14年

図10 伽藍変遷3(昭和14年)

写真3 釈迦堂

6.3昭和6年日蓮聖人六五〇遠忌～昭和14年(1931～1939)

昭和12年に接続の廊下を除去するとともに、釈迦堂を祖師堂の西側の地に移すことにした。(図11)これを機に堂の内外ともに修繕と改装を図った。特に、兵庫県の川端半兵衛氏夫妻の丹精によって奥殿(間口9.79m、奥行き5.15m)が増築された。さらに仏具の荘厳・石燈籠など旧観を一新した釈迦堂となり、内外ともに整うと仏殿位牌堂に安置されている歴代法王の位牌を本師堂内陣に、日蓮聖人の直壇や大壇那の位牌を外陣に遷座した。その後名前も新たに同14年、本師堂(写真4)として開堂入仏落慶式が執り行われた。そのため以後、昭和54年の大本堂建立の為取り壊されるまで、本師堂は主要堂宇の1つとして数えられるに至った。

表4　身延久遠寺年表3

1937年	昭和12年	この年、御真骨堂と釈迦堂の接続の廊下を除去し、祖師堂の西側の現在地に釈迦堂を移す
1939	昭和14年	1-12身延本師堂内陣・奥殿落成入仏式を行う
		5身延山堂の内外整い、仏位牌堂から歴代法主の位牌を本師堂内陣に移し、宗祖の直檀や大檀那の位牌を同外陣に遷座す

昭和14年～昭和60年

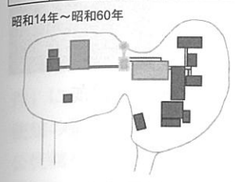

図11 伽藍変遷4(昭和14年)

写真4 本師堂

6.4昭和56年日蓮聖人七百遠忌を中心(1939～2014)

昭和14年以降、地震や台風といった災害や火事等が多々あり、屋根の葺き替えや改修などが行われていたが、主要堂宇である祖師堂や御真骨堂などの移動・再建といった大きな動きは無かった。だが、昭和52年には日蓮聖人七百遠忌の主要事業として大本堂建設が審議され、昭和54年に本師堂の取り壊しが行われた。その後、昭和58年に間口32m、奥行51mの大本堂の建設、また、立教750年慶讃事業の1つとして平成14年に報恩閣が建設され現在に至る。(図12)

表5　身延久遠寺年表4

1979	昭和54年	2-4久遠寺開基堂遷座式
		2-6久遠寺大本堂建立のため本師堂解体作業始る
		5-26大本堂建立地鎮祭
		9-25開基堂移築遷座完成式
1980	昭和55年	2-20身延山納牌堂新増築(6階建て鉄筋)地鎮祭
		6-8大本堂起工式
		7-1身延山大奥水鳴楼上棟式
1981	昭和56年	3-18身延山新納牌堂上棟式・法喜堂前信徒休憩所落成式挙行
		10-7大本堂上棟式挙行

図13 身延山絵図（昭和）

写真5 上空写真(昭和20年代)

昭和60年～平成26年

図12 伽藍変遷5(現在)

6.5まとめ(伽藍変遷)

伽藍の変遷を追っていったが、まず明治8年の大火から何が一番最初に再建されたのかという観点に着目して考察をしていく。

初めに再建されたのは、祖師堂と位牌堂であった。このことから、身延久遠寺において最も重要な堂宇は祖師堂もしくは位牌堂であることが分かる。他の日蓮宗寺院での祖師堂・位牌堂の位置づけは本研究で取り扱っていないため不明であるが、少なくとも久遠寺では日蓮上人が最上位の信仰対象であるのではないだろうか。そのため、本堂よりもまず祖師堂をという思考に至ったのでないかと推測される。

また、身延久遠寺では、以前本師堂として使用されていた堂宇が明治8年の大火の直後から名称を変更して利用され続けていた事が判明した。このことから、日蓮宗寺院では建築そのものに関係なく用途を優先する傾向があったと考えられる。また、時代背景に着目し考察してみると、再建を行わなければならなかった時代は明治維新後であり、神仏分離令を布いていた為、建物を使いまわすしかなかったとも考えることが出来る。このことから神仏分離令が原因で寺院の経済基盤が崩壊。資金が不足した為、新たに建設することが不可能であったと考えられる。

7　総括

本研究は焼失したが再建され現存している伽藍を対象とし、調査で得た図面で復原を行い絵図との比較をすることで久遠寺伽藍についての考察を行うことを目的として挙げているが、明治8年の大火以降の伽藍の変遷を追うことによって再建の順序や当時の伽藍に対する価値観という観点からも調査を行ってきた。

初めに明治8年の火災以前の伽藍配置であるが、5.3のまとめの通り、祖師堂を伽藍の中心として捉え文字曼荼羅を意識しつつ堂宇が配置されていたように思われる。多少のズレは存在するが、立地条件等を考慮すれば誤差の範囲内である。なぜ祖師堂を中心と捉えているのかは、日蓮聖人の遺骨があることが大きな理由として挙げられるだろう。これらの考え・志向によって久遠寺伽藍という宗教的な環境をつくりあげていると思われる。

しかし明治大火以後では、祖師堂を中心とした伽藍配置、文字曼荼羅を意識した伽藍配置といった2つの伽藍志向が薄れている。理由としては、明治時代に政府が行った神仏分離令などの政策による寺院の経済基盤の崩壊であろう。

ただ、現在久遠寺境内にある仏殿納牌堂・本師堂(釈迦堂)・祖師堂・御真骨堂といった主要堂宇やその他の施設がそれぞれ宗教的な雰囲気をかもしだすものであると共に、それらが統一されて久遠寺伽藍という宗教的な環境をつくりあげているのではないだろうか。

参考文献

1) 『日蓮宗寺院の建築』1936年　藤島亥治郎
2) 丹羽博亨「日蓮の教義・行儀と伽藍観」
3) 丹羽博亨「中世における日蓮宗富士門流の伽藍と建築」日本建築学会計画系論文集第331号・343号
4) 『身延山久遠寺史研究』1993年　林是晋
5) 『新版仏教考古学講座』1984年　石田茂作
6) 井上博文「身延山久遠寺について」　大崎学報第141号